

令和2年度あいちラーニング推進事業研究報告書

学校名 愛知県立 熱田 高等学校

研究テーマ	主体的に学び続ける生徒の育成を目指した授業づくり	
本年度の研究目標	(1) 昨年度の研究指定事業を受けて、本年度も継続して各教科で発問について、さらなる研究を進め、深い学びを追究する。 (2) 授業内のグループ学習や家庭学習等でICTを積極的に活用し、主体的対話的な学びを実践する。 (3) 次年度に向けて継続できる取組となるよう年度末に振り返りをし、改善点を見出す。	
研究の実施内容		
実施月日	内 容	備考 (対象生徒等)
6月30日(火) 7月2日(木) 7月15日(水) 11月2日(月) ～6日(金) 11月5日(木) 11月11日(水) 随時 11月19日(木) 11月25日(水) 12月16日(水) 1月29日(金) 2月10日(水) 2月12日(金) 2月12日(金)	令和2年度あいちラーニング推進事業説明会 カリキュラム委員会・職員会議にて研究計画の概要を説明 県へ計画の報告 授業公開週間を活用して、授業研究を実施  ロイロノート・スクール シンキングツール研修会(リモート) 授業見学(天白高・東郷高・常滑高より来校) 授業研究 カリキュラム委員会にて中間報告 岡崎西高等学校学校視察 豊田南高等学校学校視察 公開授業及び研究協議会開催 職員会議にて最終報告 学校関係者評価委員会にて最終報告(書面にて開催) 県へまとめの報告、HPにて取組内容の公開開始	
研究成果の評価及び普及・還元に関する実績		
1 全体を通して カリキュラム委員会及び教科会、学年会を通じて本年度の取組内容についての情報を共有した。具体的な成果として、ロイロノート・スクールの活用を促進し、授業の在り方を変えることができたことが挙げられる。 また、ICTの活用に関しては、年度当初から生徒個人所有のスマートフォンなどを授業内で活用してきたが、年度途中でWi-fi環境の整備やタブレットが導入されたため、その活用を主とした。しかし、あいちラーニング推進事業と長寿命化工事が重なり、工期の影響からアクティブラーニングルームの整備が遅れた。 2 ロイロノート・スクールの活用について 本年度よりロイロノート・スクールを導入することは既決事項であった。導入のための準備も進めていたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う休校がしばらく続いたため、授業内におけるグループ活動に利用するという当初の目的から転じて、オンラインでの課題の指示・配信・回収に利用することにした。 この段階で様々な機能について試行錯誤したことが後の財産となり、授業改善に繋がっている。		

また、生徒全員がスマートフォンなど情報端末を所有していたことに助けられた。

### 3 ICTの活用について

ロイロノート・スクールは、休校明けより授業や家庭学習で活用されるようになった。しかし、校内のWi-fi環境が整備されていない状態であったため、生徒個人のポケット通信に依存することが実情であった。保護者会等で、通信費用に対して何とかならないかという意見もあったが、学習利用ということもあり、概ね理解していただけたと考えている。そして、急ではあったがWi-fi環境も整備され、その後は生徒・保護者に負担をかけることがなくなった。

一方で、ロイロノート・スクールは各教科で様々な方向に広がりを見せた。先生方の柔軟な発想と情報発信力により教科の垣根を越えて学び合いが進み、さらなる進化を続けている。そして、学校行事やLT、総合的な探究の時間での活用も進んでいる。

また、年末にタブレットの配備が決まったが、これを受けて、今後はタブレットの活用とその利用方法の研究も課題となっている。公開授業において試験的にタブレットを活用したが、活用してみると様々な課題や発見があった。その一例として、グループ学習においてタブレットは二人に1台あると効果的であるという発見があった。さらにタッチペンは生徒にとっては利用しやすく、指示がなくても自発的に利用方法を工夫していくこともわかった。特にタッチペンを手書き入力に利用していた生徒を少なからず見かけたことは今後の活用にあたって重要な指針を示していると思われる。生徒にとってはキーボード入力より手書き入力の方が馴染みやすく、授業効率も良かったと思われる。

今後は、一人1台タブレットになった場合のタブレット活用方法を研究していきたい。現在検討していることとして、記述した二人で1台利用を応用して、1台を情報提示用、もう1台を提出のための課題作成用にするなど、各タブレットの役割を分けることで、グループ学習にどのような効果があるかを検証していきたい。

### 4 公開授業及び研究協議会について

公開授業及び研究協議会には本校の教員も含め多くの先生が参観してくださった。研究協議会では、様々な意見や質問があった。質問の中で目立ったのは、ICTの活用によりどのような資質・能力が身に付くのかということであった。しかし、この問いに関する回答は现阶段では持ち合わせていない。その理由として、「評価に関する研究を進めた上でなければ整理できない面があるということ」「ある事象が特定の資質・能力を育成するのではなく、複合的な資質・能力の総合知として獲得されるものであるということ」の2つが挙げられる。

つまり資質・能力とは、発達段階において獲得・伸長するものであるが、あくまでもそれは知識・技能や思考力・判断力・表現力等を構成する要素に過ぎず、その要素が単独で成り立つことはない。常に相互に結びつき影響し合うものである。そのため、ICTを活用した授業を推進すれば、何か大きな変化が起こるということではなく、従前の授業で培っていた資質・能力がより効果的に獲得できるように授業を再編成することにより、授業のねらいや単元の学習内容が明確化できる点が重要であると考え。換言すれば、ICTの活用とは、新しいツールが加わっただけに過ぎず、そこに意味を見いだすことは適当でない。むしろ、その活動に価値を生み出し、生徒のやる気や授業の質の向上に力を注ぐことが重要である。

また、ICTの活用により、授業が効率化され、誰でも同程度の授業の質が保証できるかという点については異論がある。授業者の視点からすると「楽」になるものではないからだ。授業の効率化とは、今まで時間をなかなか割くことが難しかった点に時間をかけられる、又は生徒が新しい知識や思考を獲得する過程を授業で体感できるという意味である。では逆に負担が増大するとも言われれば、必ずしもそうとも言い切れない。なぜなら、どのような授業においても教師の「情熱」が必要である。教師である以上、熱量のある授業をどう組み立てるかに心血を注ぐ毎日であろう。その手助けをする一つのツールがICT機器やその環境であると捉えられる。

### 5 次年度以降の取組等について

次年度以降は、次の(1)から(4)に重点をおいた研究を継続したい。

- (1) 評価の研究と新教育課程における評価の確立
- (2) 上記(1)のための問いの研究の継続的研究
- (3) 一人1台タブレットの環境整備とその活用方法の研究
- (4) ロイロノート・スクール等の活用促進及びその情報共有

以上の課題は最終的には(1)の評価に集約される内容であるが、急進的に評価を考えると

も困難であると考え。したがって、現在までの学校内での取組や研究の成果等を土台として従前通り授業改善を通して評価の研究に取り組んでいきたい。また、全県的な視野で学校間における取組の効率的即効的な共有方法を検討していただけると有難い。

6 結びにかえて

コロナ禍の中での研究であり、当初予定していた他校への視察などが中止になるなど、様々な制約があった。このような状況下で研究に勤しんだ本校の教職員をはじめとする多くの方々へ感謝申し上げる。

**アクティブラーニングルーム (完成前)**

黒板をホワイトボード仕様に予定



**授業の様子**

